

学卒学生の生徒指導力を高める教職大学院の授業の効果について

——理論と実践の統合の試みから——

葛 上 秀 文*, 丹 羽 敦 子*, 仁 木 敏 明**

(キーワード：生徒指導，共通科目，実習科目)

1 はじめに

教職大学院が平成20年に設置され、その後、新設が進み、平成28年度には45大学となっている。教職大学院は、社会変動に対応しうる高度な専門的職業能力を備えた教員を養成することを目指し、当面、①学部段階での資質能力を修得した者の中から、さらにより実践的な指導力・展開力を備え、新しい学校づくりの有力な一員となり得る新任教員の養成、②現職教員を対象に、地域や学校における指導的役割を果たし得る教員等として不可欠な確かな指導理論と優れた実践力・応用力を備えたスクールリーダーの養成の2つの目的・機能として、設置された(中央教育審議会、2006)。

鳴門教育大学においても、平成20年度に教職大学院を設置し、新任教員養成を目指して教員養成特別コースが設けられた。本コースでは、新任教員に特に必要な力量として、授業実践力、生徒指導力、学級経営力をあげ、それらを、大学院の授業と実習を連動させながら、着実に向上させるカリキュラム開発を進めてきた。平成28年度からは、表1(巻末に記載)のように、前期の3つの力と大学院の授業、実習を体系化し、力量形成を目指している。今回は、その中で、生徒指導力に焦点を当て、関連する授業(小中学校の生徒指導とキャリア教育)と実習(基礎インターンシップ、総合インターンシップⅠ)の中で、平成28年度入学生および小学校教員免許取得のため3年在学している平成27年度入学生がどのように成長したか、分析する。

2 実践の概要

生徒指導に関し、教育委員会は様々な対応事例を出している(徳島県教育委員会、2008、岡山県教育庁指導課、2012など)。その中で多く取り上げられるのが、授業妨害など、子どもたちが自分の感情などをコントロールできず、問題が起きるケースと、子どもたちがうまく気持ちを表出できず、問題がこじれてしまうケースである。両方のケースとも、支援が必要な子どもがトラブルの中心となることも多い。これらの事例に対応する生徒指導力の育成を目指し、教員養成特別コースでは、カリキュラムを構成している。生徒指導力育成の中心となるのが、1年次に開設される学卒学生向け共通科目「小中学校の生徒指導とキャリア教育」、実習科目の「基礎インターンシップ」、2年次に開設される「教育実践演習Ⅱ」、「総合インターンシップⅠ、Ⅱ」である。

小中学校の生徒指導とキャリア教育は、1年前期に開講する「学級経営の実践方法論」と協働して進めている。具体的には、学生を3グループに分け(平成28年度は、小学校下学年、上学年、中学校の3グループ)、それぞれ20名の学級の子どものプロフィールを教員側から提示する。小中学校の生徒指導とキャリア教育では、それらの子どもたちが起こすトラブルへの対応を考え、学級経営の実践方法論では、その学級でどのように学級を作っていくか考えることとしている。同じ学級の子どもたちについて考えることで、より多面的に教育のことを考えられるようにするとの配慮からである。

この授業は、全15回を、実習科目の基礎インターンシップ前に行う前半部分と、実習の振り返りを中心とする後半部分で構成している。基礎インターンシップは鳴門教育大学附属小、中学校で行い、週5日5週間の実習である。

前半部分は全7回で、1回目がオリエンテーション、2～4回が、自分をコントロールできない子どもへの対

*鳴門教育大学教員養成特別コース

**鳴門教育大学コラボレーションオフィス

応、5～7回が、気持ちをうまく表現できない子どもへの対応を考える。それぞれ、2、5回目は、教員側から事例を提示し、その事例について考え、残りは、学生たちがグループ内で二つに分かれ、プロフィールの子どもから、事例を設定し、それをもう一つのグループが教師役として対応する形としている。

後半部分は、8、9回が、キャリア教育の現況についての講義とし、10、11回が、自分をコントロールできない子どもの事例について、実習中に経験した子どものケースを報告し、それをグループで議論する。12、13回は、同様に、気持ちをうまく表現できない子どものケースの交流とし、14、15回は、全体で、2年次の実習に向けて、生徒指導のポイントを議論する形とした。

2年次は、実習科目「総合インターンシップⅠ」において、鳴門市内の公立小中学校で4月から5月にかけて週3日8週間の実習を行う。1年次の授業と同様に、実習中に経験した子どもの事例を整理したものを、グループで交流する機会を7月に持っている。

後期は、実習科目「総合インターンシップⅡ」をⅠと同じ実習校で、週3日10週間行っている。同じように、子どもの事例を整理し、1年後期、2年前期、2年後期の3回まとめたものを、最終成果報告書の一部とし、2年間の生徒指導力について考察を行うこととしている。

今回は、2年前期の振り返りまでの部分について、分析する。1年次は15名、2年次は12名がそれぞれの授業を受講した。1年次に採用試験に合格し中退した3名は、分析対象から外した。

3 実践の実際

(1) 1年次前期の実践

1年次前期は、教員側で提示した架空の学級プロフィールに基づき、子どもの事例について考えていった。

1) コントロールがきかない子どもの対応

プロフィールに基づき、教員側から、次のような事例を提示し、その背景と対応について、グループで考えさせた。ポイントとして、指導すべきところ（やってはいけないこととして、きちんと指導すべき部分）と、寄り添うところ（その行動を生み出した背景を読み取るため、子どもの気持ちにより添う部分）を意識し、指導する子どもが、今後同じような場面に直面したとき、自分で判断して、よりよい行動を取れる関わりを考えてもらった。

グループから教師役を出し、別のグループに子ども役を出してもらい、子ども役の学生には、その問題が起きた背景を提示し、それを踏まえたロールプレイを行ってもらった。ロールプレイの簡単な流れを、教員が板書し、よかった部分、課題だった部分を振り返る機会を設定した。授業で提示した事例と背景を一つ示しておく。

事例

Bさん（5番）は、給食の時間、嫌いな野菜が出て、それを友だちにとってもらおうとしていた。それをみたCくん（16番）が「嫌いなものを友だちに押しつけている。いやなやつ」と馬鹿にしたようにいった。Bさんは無視していたが、Cくんや、周りの子がしつこくいつてきたので、給食の入った食器をCくんめがけて、投げつけた。

背景

Bさんは、苦手なものも食べようと努力しており、今回も、少しでも食べて、後を友だちに食べてもらおうとお願いしていた。友だちも、Bさんの頑張りを認め、食べてあげようとしていた。それなのに、Cくんが挑発してきたので切れてしまった。

この事例について対応した学生は、Bさんの問題を起こした背景を丁寧に読み取る関わりを進めていった。一方、指導すべき点についての納得の部分がやや不十分であった。たとえば、この事例について、食器を投げつけたことは、どのような理由があっても認められないことであるが、その点を十分に理解させる過程が弱かった。このことは、他の事例を考えたグループにも共通していた。

次の時間は、学生たちが、事例を考え、それをもう一つのグループがロールプレイすることにした。学生たちには、次の手順で考えさせた。

○手順

- 1 各グループの中で、それぞれ2つのグループを作る
- 2 グループで、事例を考える子ども（2人）を決める（グループで違う子どもを）
- 3 前回の事例を参考に、子どもたちがどのような問題を起こしたか、その背景はどのように設定したかを、ワークシートに記述する
- 4 2人の中から、もう一つのグループに考えてもらいたい事例を決める
- 5 コピーされたもう一つのグループが考えた事例の子どもの対応について考える

○事例を考えるにあたって

- 1 その子どものイメージを膨らまそう
これまでの経験から、近いイメージのタイプを出し合おう
その子のよいところは何か、課題は何か？
好きなこと、嫌いなこと、性格は？
- 2 どのような問題が起きるか、考えよう
対教師、対子ども、対器物
- 3 具体的な問題を設定しよう
いつ、どこで、どんなことが
- 4 その子どもがそんなことを引き起こす背景を考えよう

どのような子どもでも、様々な生徒指導上の課題を引き起こす。教師は、それに適切に対応していくことが求められる。そのためには、常に、問題は起こるものだという認識に立ち、子どもたちの微妙な変化を察知していくことが重要である。その意識の重要性を理解してもらうため、事例を考えさせるプロセスを導入している。学生の考えた事例の一つを下記に示しておく。上学年の事例である。

事例 子ども18くん

修学旅行の班決めて日直だった18くんは司会を任された。

教師側から班決めはクジで決めるという指示をしていた。話し合いのなかで13さんは頑なにクジで決めるということに反対しており、18くんは「先生が決めたのだから！」という様子でキレた。

背景

18くんは、いつも一緒にふざけている友達と一緒にの班になりたいと思っていた。そのためくじに細工をし、友達と同じ班になるようにしていた。それを知った13さんはクジで班決めすることに抵抗し、公平な決め方をしたいと言った。

18くんは普段、教師の言うことを聞かないが今回は「先生の言うことを聞いている」ということを盾にして正義感を振りかざし、クジを続けようとした。

（教師は18くんがクジに細工していることを知らず、細工を知っているのは13さんだけの状態）

学生たちは、事例を考える際、様々な場面が設定できるようになっていた。そのことが本当に起こるか、起こるとするなら、どのような背景が考えられるか、グループで議論することにより、子どもたちの見る視点を多面的に持つ必要性について、考えられるようになった。

この事例を、別のグループが対応を考え、教師役としてロールプレイを行った。子ども役は、事例を考えたグループから出したため、背景も含め、より現状に近い文脈でロールプレイが行われた。

2) 自分をうまく表現できない子どもの対応

自分をうまく表現できない子どもの背景には、コミュニケーション力、想像力、社会性の面で課題のある子ども、すなわち、特別な支援が必要である子どものケースが多く含まれる。そこで、そうした子どもの対応について、事例をもとに考える学習を行っている。今年度設定したプロフィールの事例が十分対応できていなかったため、「特別な支援が必要とする子どものための実践ヒント集」（岡山県教育庁特別支援教育課，2013）を参考に、

事例を作成した。

事例について考える前に、自分をうまく表現できない子どもの場合、支援が必要なケースが多いこと、その場合、その解決を、子どもの努力に求めるのではなく、その子が対処できる環境、構造を用意することが重要である点について指導した。しかし、次の事例について、対応を考えたが、「ちゃんとメモをかけているかチェックする」「家庭と協力して、生活習慣の改善を図る」といった、その子どもが原因であるという考え方が多く議論されていた。議論に入り、課題の整理を進め、事例の解釈を深めていったが、こうしたケースへの対応について、十分な時間をかける必要性を感じた。

○事例 5（不注意な間違いが多い：視力自体問題ないが、写し間違いがある）

E さんは、学校生活の中で、ぼんやりしているように見られることがよくあります。教職員の指示も聞いているような、聞いていないような感じです。授業中も、突然の質問に答えられなかったり、勉強しているところとは違うページを開いていたりすることがよくあります。テストでは、解答欄を間違えたり、筆算の位取りを間違えたりするケアレスミスが多く、実力通りの点数がとれません。

(2) 1 年次後期の実践

10月末から5週間、鳴門教育大学附属小中学校で実習を行い、そこで出会った子どもの事例から、コントロールがきかない子ども、自分をうまく表現できない子ども、のケースをまとめ、それをグループで議論する授業を行った。今回は、コントロールがきかない子どもの事例について、4で分析する。

授業は、1回180分で行い、前期の授業と同じグループに分かれ、一人10分報告、その後20分議論、という形で、1回の授業で5名が発表した。3つのグループについて、各グループにコース教員をコーディネーター役として配置した。

(3) 2 年次前期の実践

4月1日から8週間、鳴門市内の実習校で、総合インターンシップを行い、同様に、そこで出会った子どもの事例からケースをまとめ、グループで議論する授業を行った。実習の振り返りの時間として設定している教育実践演習Ⅱの時間を用いた。授業の進め方は、(2)と同様である。

これら2つの授業で、学生が提出したレポートをもとに、学生の生徒指導力について、次節で分析を行いたい。分析に用いたレポートは次の3種類である。1年後期に提出した「子どもの事例」について、「自身の対応の強みと弱み」について、2年次前半に提出した「子どもの事例」についてである。1年後期と2年前期のレポートの形式は同一である。

4 学生の生徒指導力についての分析

(1) 生徒指導力の不安についての分析

1年の「小中学校の生徒指導とキャリア教育」の最後に「自身の対応の強みと弱み」についてのレポートを提出させた。その中から、自身の弱みと感じている点についてまとめたのが表2である。A～Cは小学1年、D～Fは小学2年、G～Iは小学3年、J～Lは中学校でそれぞれ実習を行った。学生の記述をまとめると、4つの課題として整理できる。

第一の基準が「一つの側面に固執」することである。子どもを多面的に見ていく必要があるが、どうしても問題に関心がいき、その指導に集中しすぎるという記述をこのカテゴリーにした。第二の基準が「子どもに寄り添えない」である。子どもを褒められない、やって当たり前、という意識が強く、子どもの気持ちにより添えないことをカテゴリー化した。第三の基準は、「指導の基準に不安」であり、自身の指導に自信がなく、この場面で指導してよいか迷ってしまう、といった不安をあげているものをカテゴリー化した。最後の基準が「関わりにくい子がいる」であり、自身にとって苦手なタイプの子どもの十分関われなかったことをカテゴリー化した。最後の「関わりにくい子がいる」はすべて、中学校で実習を行った学生で、子どもたちの実態が多様になり、その指導の難しさを実感していると考えられる。

表2 生徒指導力に関する自身の弱みの分析

	一つの側面の固執	子どもに寄り添えない	指導の基準に不安	関わりにくい子がいる
A			○	
B	○			
C	○			
D		○		
E		○		
F	○			
G		○		
H			○	
I			○	
J				○
K				○
L				○

(2) 学生の「子どもの事例」についての分析

今回は、小学校で実習を行っている学生の分析に焦点を当てるため、最初の3つのカテゴリーを課題としてあげた学生からそれぞれ一人ずつ取り上げ、「事例について」の理解が、1年次後半と2年次でどのように変化したか見ていきたい。

1) 一つの側面に固執するCの場合

Cは基礎インターンシップでは小学1年、総合インターンシップIでは小学5年で実習を行っている。基礎インターンシップについてまとめた事例が、表3（巻末に記載）である。周りの子どもにすぐ手が出てしまう子どもの事例で、その子にどのように指導したかがまとめられている。特徴として、次の2点が挙げられる。第一に、対象の子どもが問題行動を起こした場合、同じ基準で対応していることである。第二に、周りの子どもとの関係を捉える視点がやや弱いことである。基準を統一にすることは、この先生は、その行動を許さないという明確なメッセージを伝えるメリットもあるが、その指導が有効か、という振り返りの視点が弱くなってしまう場合がある。

1年次は、事例のレポートともに、自身の生徒指導の強みと弱みについて、自己分析したものも併せて提出させた。Aが示した弱みとして、

目の前で起きたことに焦点が集まりすぎていて、何でこのような問題が起こっているのかという背景を考えるとなく、その場の問題を解決することばかり考えていた。家庭内での問題などの想定をした上で、叱り方や接し方も臨機応変に対応する力が子どものことを理解できるようになるためにも必要である。

と、自己分析も行っており、総合インターンシップIに向けて課題の改善を図ろうとしていた。

総合インターンシップIの事例をまとめたのが、表4（巻末に記載）である。この事例で取り上げている子どもは、学級担任も特に気にかけている子どもであるが、「子どもの概要」にあるように、その子どものよいところもよくとらえられている。また、「対応時に留意したこと」を見ると、基準を調整したり、状況に応じた対応がとられるようになっていくことがわかる。また、配属学級の担任（メンター）との連携を意識した対応がとられるなど、基礎インターンシップを踏まえた実践の改善が進められていることがわかる。

2) 子どもに寄り添えないEの場合

Eは基礎インターンシップで小学2年、総合インターンシップIにおいて小学6年で実習を行っている。基礎インターンシップについてまとめた事例が、表5（巻末に記載）である。周りから軽んじられている子どもの事

例を取り上げている。「子どもの見立て」にあるように、この子どもの背景を多面的にとらえようとしているところがあり、また、「対応時に留意したこと」にあるように、周りの子どもの問題に目を向けられている。一方、子どもの理解が先走りしすぎることを自覚しているところもある。

このことは、自身の強み、弱みに関するレポートでも次のように触れている。

私の子ども対応の弱みは、子どもの話を傾聴しきれないことだと考える。私は、何か問題が起こった場合に、自分の中にその問題を解決する道筋を考える。子どもの話を聞いていてもその道筋が頭の中に浮かんでしまい、その道筋通りに子どもを誘導しようとしてしまう。それは、子どもの自己解決の道を潰してしまうだけでなく、教師の独りよがりになってしまう可能性がある。

この点を改善する取り組みを、総合インターンシップでの目標としていた。

2年次は、小学6年に配属され、子どもたちと積極的に関わっている。その事例をまとめたのが表6（巻末に記載）である。子どもを多面的に見られる良さを伸ばすとともに、周りの子どもに対する意識も高まっていることがうかがえる。また、子どもの関わりの中で、その子ども自身が気づけるように、時間をかけて指導することを心がけている様子もうかがえる。ただ、まだ、引っ張っていくことに課題を感じており、そのことが後期の課題としてあげられている。

3) 指導の基準に不安のあるAの場合

これまで取り上げた2人に比べ、Aは自身の生徒指導力に自信を持っておらず、そのことが対応にも出ている。Aは、基礎インターンシップで小学1年、総合インターンシップIにおいて小学5年で実習を行っている。基礎インターンシップの事例をまとめたのが表7（巻末に記載）である。クラスのリーダーで、自分の考えを譲る子どもが苦手な子どもの事例を取り上げている。子どもを指導する基準が曖昧なことを、子どもに指摘されるといった課題も見られる。自身の対応をきちんと振り返り、次に生かそうとしているところが見られるが、条件が少し変わると、気後れする部分も見られた。

自身の強み、弱みのレポートにおいても、

児童同士で問題が生じた際、話を聞くだけになってしまい、解決することができなかった。児童が問題行動を起こした際、どのように指導すればいいのか迷ってしまい、指導するタイミングを逃してしまった。「これは良い」「これはダメ」「これだけは許さない」などの判断基準や、「児童にこうなってほしい」などの思いがない。

と述べており、その改善を総合インターンシップIで取り組もうとしていた。

総合インターンシップIで取り上げた子どもは、自分を表現することが苦手な子どもの事例である表8（巻末に記載）。その子との関係構築に苦慮している様子が見えるが、子どもが信頼して、心を開くところまでいっていないようである。「児童にこうなってほしい」という思いを持って指導することを目指していたが、そこに十分到達できていない。

(3) 考察

3人の学生のレポートをもとに、学生の生徒指導力の成長を分析した。C,Eの二人は、基礎インターンシップの反省を踏まえ、総合インターンシップIの実践において、自身の課題の改善につなげていた。このカテゴリーに課題を挙げていた他の4人も、どちらかといえば子どもたちに積極的に関わる学生たちで、子どもたちとの交流の中で、積極的に学び、次の対応につなげられているところがあった。一方、Aは、自身の指導力に自信を持っておらず、その結果、対応に迷いが出ている。このカテゴリーの他の二人も、同様の課題が見て取れた。

大学の授業科目と対応させながら、実習の学びをまとめていく現在の方向性は、教職大学院の改革の方向性を示す報告書の中でも指摘されているものである。今回の分析を通して、子どもとの関わりが積極的な学生には、今回の形を通して、学生に一定の実践力をつけることにつながっていると考えられる。一方、自身の指導に自信のない学生には、その課題の解決につながる取り組みを追加していかなければならない。現状では、実習期間中の指導は、ゼミ担当教員によるものに限定されているが、中間時に学生が一度集まり、情報を共有するとともに、目標を再設定するなどの関わりを持つ必要があるかもしれない。

5 最後に

ここまで、生徒指導力の育成を目指して、大学の授業と実習科目を連動させる取り組みについて分析してきた。同様の取り組みを、授業実践力、学級経営力の育成でも行っており、その観点からの分析が必要となる。また、学生のタイプによる指導の充実の必要性も浮かび上がってきた。実習校の学級担任（メンター）とも、学生の実態を共有しながら、一人一人の学生の指導力の向上を図る教職大学院のあり方を追求していく必要がある。

文 献

岡山県教育庁指導課 2012 生徒指導対応ハンドブック～暴力行為・不登校を中心として～

岡山県教育庁特別支援教育課 2013 特別な支援を必要とする子どものための実践ヒント集

徳島県教育委員会 2008 児童生徒の問題行動に対する初期対応マニュアル

中央教育審議会 2006 今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）

表 1 教員養成特別コースのカリキュラムの体系

		授業実践力	生徒指導力	学級経営力
到達目標	設計力	学習指導要領にもとづく授業設計	多面的理解にもとづく子ども対応計画の作成	目指す学級像と具体的方策の設計
	実践力	子どもの実態に応じた授業実践	子どもの実態に応じた生徒指導	子どもの実態に応じた学級経営の対応
	省察力	実践を振り返り、授業改善に還元	子ども対応計画の充実	学級経営計画の充実
1年前期	4月末	ゼミ決定		
	4～6月	授業実践研究Ⅰ 授業づくりのチーム演習 グループに分かれ、授業設計、実践を行う	小中学校の生徒指導 設定した学級の子どもたちの対応について、グループで検討して考える	学級経営の実践方法論 設定した学級の状況を踏まえた学級経営の在り方について考える
1年後期	10月末～11月末	授業実践研究Ⅱ（実習前、実習中） インターンシップにおける授業設計		
		基礎インターンシップ		
	12～1月	授業実践研究Ⅱ それぞれの授業で、実習の成果について検討し、まとめる(1)	小中学校の生徒指導	学級経営の実践方法論
	2月中旬	構想発表		
2年前期	4～5月	総合インターンシップⅠ		
	6～8月	教育実践演習Ⅱ 実習での実践をもとに、3つの観点を意識してまとめる		
	9月	中間発表		
2年後期	9～11月	総合インターンシップⅡ		
	12～1月	教育実践演習Ⅱ 各自のテーマに基づき、実践を行った結果についてまとめる		
	2月	評価プレゼン		

表3 Cのケース（1年次）

事例	Fくん（小1）
子どもの概要	<ul style="list-style-type: none"> ・毎朝早く登校（クラスで1・2番目あたり）し、外に遊びに行く。 ・場を和ませるために面白いことをする存在で明るい。 ・授業中に配布するプリントを解くのが全体の中でも早く、数多く問題をこなすことにやりがいを感じている。 ・学力はそれなりに高い方であるが、発表することがあまりない。 ・喋る言葉に癖がある。（かすれ声） ・気分屋でもある。 ・人の言葉をすぐ信じてしまう出来事があった。
あなたが対応したときの子どもの特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・ほぼ毎日のように周りの友達を叩いてしまったり、相手を不快にさせる言葉を発してしまったりすることがあった。 ・喧嘩の出来事について関わっているのはいつも同じ子。 Fさん⇒席が近くで関わる機会が多い Mくん⇒仲良しで近くにいることが多い ・なかなか自分の非を認めようとしない。
周りの子ども、教師などの対応	<ul style="list-style-type: none"> ・休み時間はみんなと同じように遊びに行っているし、授業中の話し合いも普通に行っている。 ・女子児童との関わりは少なかった。 ・喧嘩に関わっていた時には呼び出して、事実確認を先生がFくんに聞いていた。 ・10分休みのときは自分のもとに遊びに来る児童とともに遊ぶことが多かった。
子どもの見立て	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭内での会話によるコミュニケーションは少ないかも ⇒学校内でも友達と話している様子はあまりない ・年上の子のことを真似しているかも
対応時に留意したこと	<ul style="list-style-type: none"> ・相手を不快にさせる発言を使わないようにといけない言葉が何なのかがわかるように話をした。 ・相手の立場に立って使う言葉を考え、行動するようにしていく。 ・叩くような行動による怪我のリスクも踏まえ、手を出してはいけないということを強く注意した。 ・Fくんも悪気があったわけではないので、同じことを繰り返さないようにしていこうねと話をした。 ・手を出す原因となったMくんにも悪いところはあったので、お互いが非を認め、ごめんなさいと言葉に出して仲直りをさせた。
話し合いから深めたこと	<ul style="list-style-type: none"> ・関わりが苦手である可能性があるため、コミュニケーションツールを授業で学んだり、教師が寄り添ってコミュニケーションを取っていったりすることも必要である。 ・コミュニケーションができるように語彙数を増やしていく支援が必要である。

表4 Cのケース（2年次）

事例	Nさん（小5）女の子
子どもの概要	<p>【良い点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・成績は上位層（特に算数のテストは良い印象） ・授業中の発言は積極的 ・百人一首が上手（クラス内の四天王） ・器械体操が得意で、放課後には体操発表会に向けて練習をしていた ・配達物を職員室に取りに行く当番はしっかりこなしている <p>【気になる点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宿題はしてきてないことが多い ・教室の掃き掃除をきちんとこなせていない ・言葉遣いで気になることがある <p>→自分のことを友達のように接してくる。</p> <p>→クラスの中で特に気にかけないといけないう重要人物（メンター曰く、Nさん中心に学級編成をしている）。メンターから聞いた話の中に、家庭訪問時に児童・保護者からNさんと席が近いことを嫌に思っている（Fさん）。給食のグループが一緒であったが、喧嘩をしたり、いじめとなるような暴言を使っていたりすることは一切ない。しかし、3人グループでの話し合いになると、Nさんは独りで問題に取り組んでいる。</p> <p>→Hさん、Mさんとは仲が良く、クラスの中でも1人になっているわけではない。</p>
あなたが対応したときの子どもの特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・教室の掃き掃除当番をきちんとこなせていない <p>⇒掃除時間の始めは自分もほうきを持って一緒に掃除をしていた。掃く場所の指示、ほうきの持ち方等の指導をしていた。掃き掃除は2人組で、Oくんは給食当番の片付けがあるので、帰ってきてOくんが真面目にしている姿を見るとNさんなりに掃除を開始する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・業間休みや昼休みは外に出ることが多いので、10分休み中に自分のもとへ寄ってくるものが多く、話をしていた。
周りの子ども、教師などの対応	<p>メンターの対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・席替えはNさん周辺のメンバーから必ず固定する。5月後半のグループは誰とでも仲良く接することのできるKさん、Nくん、Yくんが周りを囲んでいた。 ・宿題を忘れてくることが多いことや、メンターの指示に従わないことがあり、よく注意されている。（同じことを3回繰り返すと叱られるのがメンターと児童とのルール） <p>周りの子どもの対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・休み時間は仲の良いHさんとMさん付近にすることが多い。居ないときは晴れでも中でしか休み時間を過ごさないMくんと一緒にすることが多い。
子どもの見立て	<ul style="list-style-type: none"> ・していいこと、悪いことの識別がわかっている、言葉や行動で表してしまうことが多い。
対応時に留意したこと	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭内での問題があるので、叱ることに気を配るようにした。 <p>⇒叱る基準の緩和（3度目までは注意する程度）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループ活動等で1人の時は、話に参加するよう声かけたり、考えている意見を聞いたりするようにしていた。
話し合いから深めたこと	<ul style="list-style-type: none"> ・表立って校内で問題が起きてはいないものの、メンターが自分にNさんの内密なことを伝えているのは、何かあったときにすぐ対応できるようにしてほしい可能性があるもので、後期のインターンシップでも引き続き観察を続ける必要がある。 <p>⇒身体への傷や日常生活での変化がないか意識して観察。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭内暴力を理由に大人へ抵抗を持っている可能性がある中で、自分のもとへ来てくれているのはNさんにとって身近な存在でもあるので、信頼関係が築き保てるように継続していきたい。

表5 Eのケース（1年次）

事例	Aくん（小2）
子どもの概要	学力的には、上の下。塾に通っているため、授業内での問題や宿題での誤答は少ない。そのため、テストを解くなどの筆記に関する勉強はよくできる。しかし、話すことが苦手で、自分の考えていることを説明しきれないことが多い。また、授業中の発言や普段での会話では、変わったことを言うことがある。
あなたが対応したときの子どもの特徴	Aくんから積極的に私と関わりを持とうとする。友達と遊びたいが、なかなかうまくいかずに嫌な気持ちになることがあるため、子どもだけではなく、教師を交えて友達と遊ぼうとすることがあった。
周りの子ども、教師などの対応	Aくんが授業中に話し始めると、長くなったり、授業内容から脱線してしまうことがあるためか、Aくんが発表しようとするとき周りの子が嫌な雰囲気を作り出すことがある。また、休み時間に子どもだけで遊んでいる際もAくんが遊びのルールを守ることができずにトラブルになることがある。同じようなことを言っていたとしてもAくんの発言が他の子どもよりも軽んじられることがあった。ギャグ、授業内での発言など。クラスの子たちの中には、周りの子どもが同じことをしているにもかかわらず、「Aくん。ちゃんと〇〇しなよ。」とAくんのみに注意をする場面も見られた。
子どもの見立て	Aくんは、周りの子を笑わせようと思って授業中や休み時間に変わった言動や行動をしているのだと考える。それは、違う子が冗談を言って周りを笑わせた場合、それに便乗して冗談を言っていることからもうかがえる。しかし、場や雰囲気を考えることなく、発言することがあるので、周りの友達から嫌がられることがある。また、その子が前に出て発表しようとするとき「また、Aが前に出てきた。」「もういいから。」などという声が聞こえてくる場合がある。 ルールを守れない点に関しては、自分がしたいことを優先してしまうのが原因ではないだろうか。（例：ドッチボールのボールを人から奪おうとする。）自分の気に入らないことがあるとすぐにヘソを曲げてしまうことがある。
対応時に留意したこと	自分勝手にしたいことをしてしまうのは、発達段階にもよると考える。もう少しその子が成長すれば、そう言った問題は減少してくるのではないだろうか。Aくんに対して指導するというよりは周りの子ども達がAくんを軽視することに問題を感じた。そのため、Aくんに対しての指導も周りに配慮した指導を行うように心がけていた。また、Aくんを軽視するような発言に対しては、少し厳しく指導していた。 まだ2年生ということもあり、積極的にAくんを除外しようとする動きは見られなかったが、一歩間違えると、いじめにもつながりかねないと危惧していた。
<u>話し合いから深めたこと</u>	<ul style="list-style-type: none"> ・できてない行動を叱るのではなく、できたことを褒める。 ・できるということにどのように価値付けしていくか。 ・教師がその子の発言に興味を示すことによって、子どもたちもその子の発言に興味をもつことができる。 ・保護者との連携を行う。 ・Aくんの問題として扱うのではなく、クラス全体の問題として考える。 ・自己コントロールの術を覚える。

表6 Eのケース（2年次）

事例	Aくん（小6）
子どもの概要	勉強への理解力は基本的には低いですが、わからない部分を丁寧に教えたり、一度解き方がわかるとできるようになる。テストなどもそれほど悪い点を取らない。授業中も積極的に発言するため、勉強が苦手という意識はそれほど強くない。 身体的には小柄で、スポーツもできる方ではないが、クラブでサッカーをしており、サッカーはうまいと自負している。 性格的には気分屋で口が悪い。友人に悪口を言いすぎるところがある。そのため、けんかになることがある。しかし全体的には友人関係は良好でクラスのムードメーカー的存在である。
あなたが対応したときの子どもの特徴	関係は良好だが、指導をしても聞かないことがたまにある。
周りの子ども、教師などの対応	授業中の私語が多かったり、切り替えが苦手である。そのことから話をよく聞かないことが多く、よくしかられている。ただし、担任との関係は良好である。
子どもの見立て	二人は普段は仲がよいが、双方とも気が強いので今回の騒動につながったと考える。
対応時に留意したこと	二人の意見を聞き、なぜこのような結果になったのか理由を考えさせた。Aくんだけが悪者にならないように、Bさんに、なぜAくんが蹴ったと思うか先に尋ねた。両者の問題点を指摘して終わり、次の授業が始まる冒頭に全体へ今回のことを説明した。 最近暴言が多く聞かれること、相手に手を上げている場面をよく見かけること。それらは人を大切にするという学級目標に反すること。力が強いもののみが得をすることのおかしさなどを伝えた。 Aくんは、「Bさんが悪気地を言わなければ蹴らなかった。俺は悪くない。」と中盤まで言っていたが、気に入らないことがあると蹴っていいか尋ねると黙ってしまい、自分の中では悪いことをしたと気づいたと思う。
話し合いから深めたこと	普段の小さなトラブルの段階で、きちんとわからせていくことの大切さ。 Aくんの良さを認めつつ、話ができるようになってきたが、まだまだ引っ張っていくところが強い。 Bさんがなぜ悪口を言うのか、もう少し深く掘り下げる必要がある。

表7 Aのケース（1年次）

事例	自分をうまくコントロールできない子ども A さん（小1女子）
子どもの概要	学力は中の上くらい。活発で授業中によく発言や発表をする。学級の中心人物。友達関係は普段は良好である。自分の考えをしっかりとっており、主張できる。好き嫌いがはっきりしており、意見が対立した際には激しく主張する。
あなたが対応したときの子どもの特徴	私に毎日ブランコを押させる。ある日、A から誘われた際に、私が「今日は鬼ごっこするんよ」と言うと「なんで!？」と機嫌を損ねる。「もう〇〇さんと約束してたから」と言うと納得する。「じゃあ一緒に鬼ごっこしない?」と言っても、鬼ごっこをしようとはしない。 私に甘えてくるときもあるが、A さんが「これすごいから見て」と見せてきたものに、私が「お～すごいね」と言うと A は「それだけ?」と言ってきたり、私に「ダメなことはダメってはっきり言わなきゃ」と叱り方について意見したりしてくることもある。
周りの子ども、教師などの対応	同じ生き物グループの B さんとは意見が食い違って喧嘩（激しい言い合い）になることがあり、いつも B さんが泣いて終わる。担任の意見に対しても納得できず「だって～だもん」と言うときもあるが、根拠を説明されると納得する。
子どもの見立て	自分の考えをもち、主張できることはすばらしいが、他者の違った意見を受け入れることが難しい。違いに敏感である。自分が気に入らないことに対して、激しく反発するため、意見が違う友達を傷つけてしまうことがある。理由がわかったり根拠を説明されたりすると、黙って納得したように見られるが、その後の行動は改善されるため、よく考えているのだろう。
対応時に留意したこと	ブランコに誘われた際はできるだけ応じるようにしたが、一人の児童と遊びすぎるのは良くないため「早く約束した人と遊ぶ」と伝えた。また、他の児童から鬼ごっこに誘われていてブランコができないときは、A さんも鬼ごっこに誘うようにした。 指示や注意をする際にははっきりと「～しなさい」と言い、その後理由や根拠を説明するようにした。 「これ見て」「これどう?」と言って何か見せてくるときには、できるだけ大きいリアクションをするようにした。
話し合いから深めたこと	A さんは周りの児童に比べ、少し大人びている印象だと言われ、確かにそうだと感じた。大人びているため、指導する際にも注意が必要である。 叱るときには、良いところを認めつつ、「A さんだったらできると思うよ」と言うべきである。すぐに解決することを目指すのではなく、3月になどようになってほしいのかを見越して、本人が「あれ、今のはどうだろう」と内発的に反省できるように指導していきたい。A さんの場合は、主張できることはすばらしいが、言ってはいけないことを分別して、うまく主張できるようになってほしい。リーダー気質なので、良いところを伸ばして成長してほしい。また、女子を褒めるときは、一人のときにこっそりと褒めることが効果的だと学んだ。

表 8 A のケース（2 年次）

事例	A さん（5 年生女子）
子どもの概要	学力はあまり高くない。勉強（特に算数）に対して少し苦手意識を持っており、自信がなさそうであるが、教えると解けるようになるので理解力はある。休み時間は特定の友人（女子 2，3 人）とよく遊ぶ様子が見られる。スポーツが苦手なようで外で遊ぶことを拒む。阿波踊りのクラブに入っており、夜遅くまで練習していて就寝時間が遅いらしい。
あなたが対応したときの子どもの特徴	授業中に私が机間指導をしていると、ノートやワークシートを隠したり、「わからん、教えて」と聞いてきたりする。教えたときはとても物分かりがよく、解けるようになるが、一問解くたびに自信なさそうに「これで合ってる？」と確認してくる。休み時間は私によく「遊ぼう」と声をかけてくる。遊んだ後には絶対「次の休み時間も遊ぼう」「明日の休み時間遊ぼう」と予約を入れようとする。遊ぶときは教室でトランプ（主にスピード）をしたり、特別支援の教室で遊んだりすることが多い。トランプをするときは本当に楽しそうに遊んでいるが、スピードだけを何度もしたがる。
周りの子ども、教師などの対応	授業中の班での話し合いにはよく参加することができている。A さんは交友関係がせまいため、特定の児童とよく遊ぶが、その児童との関係もあまり良くないようである。教師との関係は特に問題ない。
子どもの見立て	私に遊びの約束をしてくるのは、休み時間に孤立するのが不安だからなのではないかと感じる。
対応時に留意したこと	遊びに誘われたときはできるだけ遊んだが、他の児童のこともあるので、遊びすぎないようにした。他の児童から遊びに誘われたときには A さんに「一緒に遊ぼう」と言って A の交友関係を広げようとしたが、A さんが遊びに加わることはなかった。
話し合いから深めたこと	A に関する情報が少なく、なかなか深めることができなかった。 総合インターンシップⅡでは前期よりも A と関わり、A の様子や A と B の関係に目を向けていきたい。また、A と B にどのような指導をしたのかメンターに聞いていきたい。

A Study on the Way of Teaching of Professional Degree Course which increases the Student Guidance Skills at Graduate Students — Aiming for Integration of Theory and Practice —

KUZUKAMI Hidefumi*, NIWA Atsuko* and NIKI Toshiaki**

(Keywords : student guidance skills, general course, Practice Course)

This article is a study on the curriculum which raise student guidance skills at the teaching graduate school in theory and practice. Specifically, 1) to acquire the concepts that are the basis of student guidance skills in general subjects, 2) to practice student guidance through practical courses, 3) to integrate theory and practice in special courses. Through this curriculum, a certain amount of improvement was seen in the graduate students.

*Naruto University of Education Special Teacher Training

**Naruto University of Education Collaboration Office